

受注手配に適用した日立 高速ファックス システム

ファクシミリ(以下、FAXと略す)は、写真、原稿、図画などの画像を電気信号に変え、通信線によって伝送し、受信側で再生し記録する装置で、書類、原稿を遠隔地へ短時間に送る手段として古くから実用化されてきた。しかし、これまでは新聞、報道、その他特定の用途に使われることが多かったが、最近に至って一般の事務用にFAXが導入され、システムとして運営される傾向が目立ってきている。特に昭和47年11月の「公衆電話法」改正により、加入電話回線網が音声通信以外に自由にできるようになったため、FAXも加入電話回線を使って手軽に利用されるようになり、FAXの一般への普及は更に活発化した。ただ、ここで問題となるのは、従来の装置の伝送時間が、A4判原稿1枚の電送に4～6分かかることで、需要の一般化とともに、より高速でより画質の良い高速FAXを要望する声も強まっていた。

日立製作所はこの要望に応じ、一般の書類ならばA4判1枚当たり伝送速度約1分と、大幅に短縮した高速FAXを開発し、昭和50年5月から発売している。本システムではFAXの心臓部である原稿読取部、記録部を固体化して高信頼度を実現し、更に帯域圧縮技術により伝送の高速化を可能としたもので、事務の合理化、情報伝送の効率化に資するところが大きくなった。

高速FAXは従来のFAXに比べて、距離が遠いほど、電送枚数が多いほど経済的であることから、東京、大阪などに本社をもち、全国ネットをもつ企業を中心に、高速FAXシステム導入が活発化している。

従来、これらの企業は本社～工場～営業所間の通信連絡には、主としてテレックスが使用されてきた。しかし、テレックスは、(1)専任オペレータが必要で、(2)漢字、図形は送ることができない。(3)パンチミスがあるなどの難点があり、高速FAXはこれらの欠点を解消し、省力化、効率化に大きく寄与

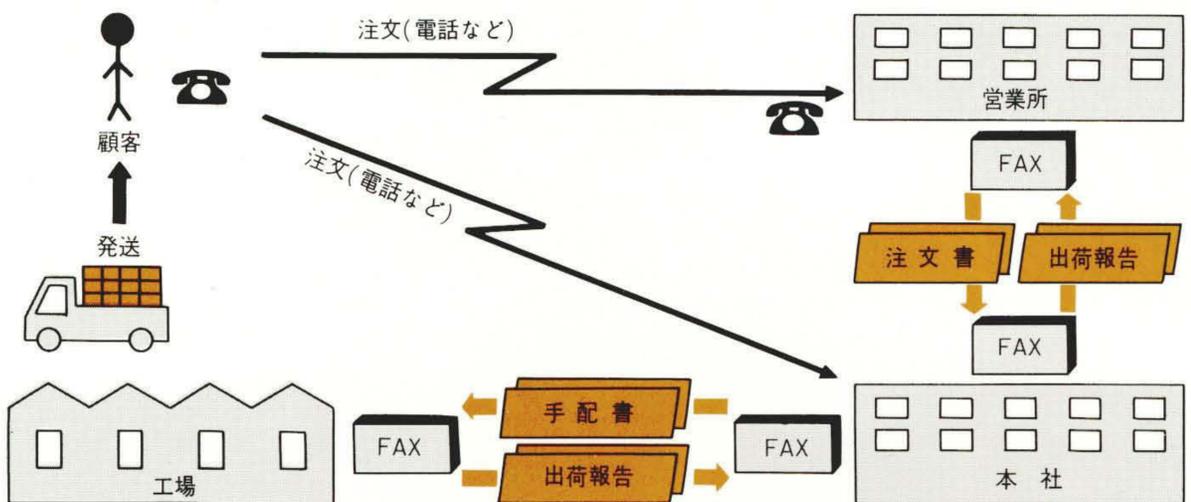


する。

大和製罐株式会社では、高速FAXシステムを採用することによって、従来17台あったテレックスは1台だけを残し、要員20名が省力化された。またFAXでは、文章が漢字入りで生のまま送られてくるので、受信側も判読しや

すく、連絡もスムーズになったという。

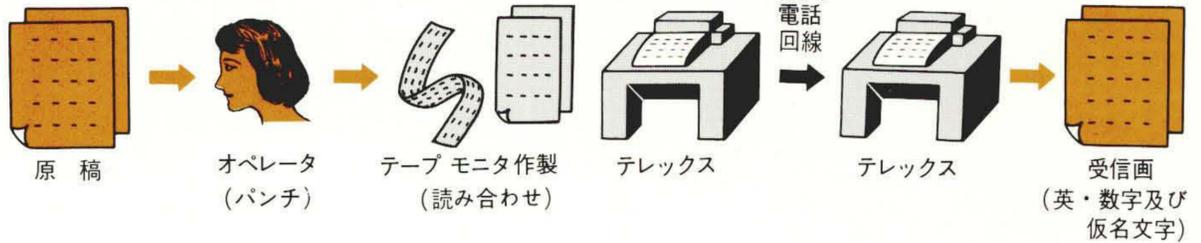
図に同社の受注手配業務の流れ及び従来のテレックスとFAXによる書類伝送の流れを示す。FAXは、オペレータが不用で、速くて、確実な分かりやすい書類の伝送手段として、更に幅広く利用されていくであろう。



注：他にメッセージ通信にも利用している。

書類の流れ

テレックス通信(従来)



FAX通信(FAX導入後)



FAXとテレックスの業務フロー